

【 復活トロパリ 第7調 】

ハリストオスか みよ、なんぢはじゅうじかにてしを
 神 爾 十 字 架 死
 ほろぼし、とうぞくのためにくえんをひ
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開
 らき、けいこうぢよのかなしみをなぐさ
 攜 香 女 悲 慰
 め、しとになんぢがふくか つして、せか
 使 徒 爾 復 活 世 界
 いにおおいなるあわれみをたまいしをつたえ
 大 憐 賜 傳
 させたまえり。
 給

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠
 じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖
 なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛
 にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生 命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調】

こうえいはちちとこおとせいしんにき
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亜使徒聖 我
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知
 ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことな あし、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たま あえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第7調 】

いまもおいつうもよよにい、アミン
 今 何 時 世 世
 しのけんはすでにひとびとをとらうるあた
 死 權 已 人 人 捕 能
 わず、けだしハリストスはくだりてそのち力
 蓋 降
 からをやぶりにほろぼしたまえり。ぢご
 敗 滅 給 地 獄
 くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ
 縛 預 言 者 同 心 喜

こびてよ 呼ぶ、きゆうせ いしゅ は しんにおる
 救世主 信居
 ものにあらわれたり、しんじゃよ、ふく
 者 現 信者 復
 か 活 つして いいで よ。
 出

司祭) (黙誦： ^{せい} 聖なる神、^{かみ} 聖者の中に^{せいじゃ} 息い、^{うち} セラフィムより^{いこ} 聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{せいさん} ヘルヴィムより^{こえ} 讚榮せられ、^{もつ} 悉くの^{かしょう} 天軍より^{ばんぶつ} 伏拝せられ、^む 萬物を^{ゆう} 無より有と
^{ひと} なし、^{なんぢ} 人を^{ぞう} 爾の^{しょう} 像と^よ 肖とに依りて^{つく} 造り、^{なんぢ} 爾が^{もろもろ} 諸の^{たまもの} 賜を以て之を^{もつ} 飾り、^{これ} ねが
^{もの} う者に^{ちえ} 智慧と^{めいご} 明悟とを^{あた} 與え、^{つみ} 罪を行^{おこな} う者を^{もの} 棄てずして、^す 其^{そのすくい} 救の^{ため} 爲に^{つうかい} 痛悔
^た を^{われらいや} 立て、^{ふとう} 我等^{なんぢ} 卑しくして^{しよぼく} 不當なる^こ 爾の^{とき} 諸^{おい} 僕を、^{なんぢ} 此の^{せい} 時に^{せい} 於ても、^{せい} 爾が^{せい} 聖な
^{さいだん} る^{こうえい} 祭壇の^{まえ} 光榮の^た 前に^{なんぢ} 立ちて、^{とうぜん} 爾に^{ふくはいさんえい} 當然の^{たてまつ} 伏拝^た 讚榮を^{もの} 奉^{もの} るに^{もの} 堪うる者と
^{しゅさい} なしし^{なんぢ} 主宰よ、^{われら} 爾^{われら} 親ら^{ざいにん} 我等^{くち} 罪人の^{せいさん} 口よりも^{うた} 聖三の^う 歌を受け、^{なんぢ} 爾の^{じんじ} 仁慈を
^{もつ} 以て^{われら} 我等に^{のぞ} 臨み、^{われら} 我等に^{およ} 凡そ^{じゆう} 自由と^{じゆう} 自由ならざる^{つみ} 罪を^{ゆる} 赦し、^わ 我が^{たましい} 靈と^{からだ} 體と
^{せい} を^{われら} 聖にし、^{しょうがいぜんこう} 我等に^{もつ} 生涯^{なんぢ} 善功を以て^{つと} 爾に^え 務むるを^{たま} 得せしめ^{せい} 給え、^{せい} 聖なる
^{しょうしんぢよ} 生^{こせい} 神女と^{なんぢ} 古世より^{よろこび} 爾の^な 喜を^{しよせいじん} 爲しし^{きとう} 諸^よ 聖人との^よ 祈禱に依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ} 蓋^{かみ} 我が^{なんぢ} 神よ、^{せい} 爾は^{われら} 聖なり、^{こうえい} 我等^{なんぢ} 光榮を^こ 爾^{せいしん} 父と子と^{けん} 聖神に^{いま} 献ず、^{いつ} 今も^{よよ} 何時も^{よよ} 世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 を 憐 愍

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 なる 神 聖 なる 勇 毅 聖

なるじょうせいのもよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 を 憐 愍

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 なる 神 聖 なる 勇 毅

せいなるじょうせいのもよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 を 憐

れめよ。こうえいはちちとこせいしん
光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせいのもよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 を 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖 なる 神 聖 なる 勇

き、せいなるじょうせいのもよ、われらを
毅 聖 常 生 者 我 等 を

あわれめよ。
憐 愍

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

プロキメン
【 提 綱 主日第7調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

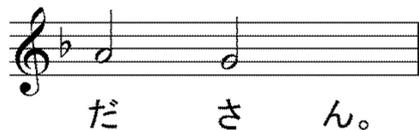
しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ
其 民 平 安 福 降
さ ん。

誦經) 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ
其 民 平 安 福 降
さ ん。

誦經) 主は其民に力を賜い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く 降
主 其 民 平 安 福 降



【 アポストロス 使徒經 221 端 エフェス書 2 章 14 節～22 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒 ^{じん たつ} パヴェルが ^{しょ よみ} エフェス人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われら わへい} ハリストスは我等の和平なり、^{ふたつ} 二の者を ^{ひとつ} 一と爲し、^{へだて} 隔の牆を ^{かき} 毀ち、^{こぼ} 己 ^{おのれ}

^み の身を以て ^{あだ} 仇を廢し、^{はい} 教を以て ^{おしえ} 諸誠の ^{しょかい} 律法を ^{りつぽう} 廢せり、^{はい} 是れ ^こ 和平を爲して、^{ふたつ} 二の者

^{もつ} を以て、^{おのれ} 己に於て、^{ひとつ} 一の ^{あらた} 新なる人を ^{つく} 造り、^{またじゅうじか} 又十字架にて ^{あだ} 仇を ^{ころ} 殺し、^{これ} 此を以て、

^{ひとつ} 一の身に於て、^み 二の者を ^{おひ} 神と ^{ふたつ} 復和せしめん爲なり。^{かみ} 且來りて、^{ふくわ} 爾等遠き者 ^{ため} 及び近

^{もの} き者に ^{わへい} 和平を ^{ふくいん} 福音せり、^{けだしかれ} 蓋彼に由りて、^{われら} 我等 ^{ふたつ} 二の者は、^{ひとつ} 一の ^{しん} 神に在りて、^あ 父に ^{ちち} 近

^う づくを得るなり。^{ゆえ} 故に ^{なんぢらすで} 爾等既に ^{いみん} 異民、^{あるい} 或は ^{たほう} 他邦の人 ^{ひと} たらず、^{すなわち} 乃 ^{しよせいと} 諸聖徒の ^{どうほう} 同邦の人、

^{かみ} 神の家屬なり、^{かぞく} 爾等は ^{なんぢら} 諸使徒と ^{しよしと} 諸預言者との ^{しよよげんしゃ} 基に ^{もとい} 建てられたり、^た イイスス・ハリストス

^{みづか} は ^{そのすみいし} 自ら其 ^こ 隅石なり。^{うえ} 此の上に ^{ぜんおく} 全屋は ^く 組み立てられ、^た 次第に ^{しだい} 築きて、^{きづ} 主に ^{しゅ} 於ける ^お 聖殿と

^な 爲る、^こ 此の上に ^{なんぢら} 爾等も、^{しん} 神に ^よ 由りて、^{かみ} 神の ^{すまい} 居處として、^{とも} 共に ^た 建てらるるなり。

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあつて、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、靈なる神のすまいとなるのである。

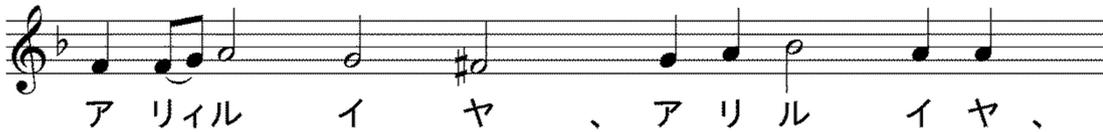
【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

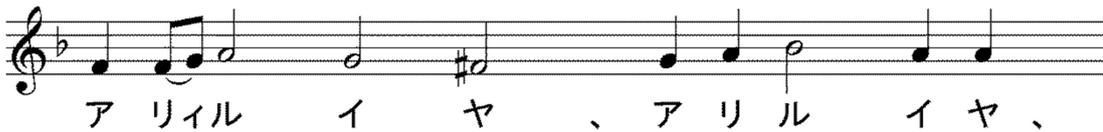
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

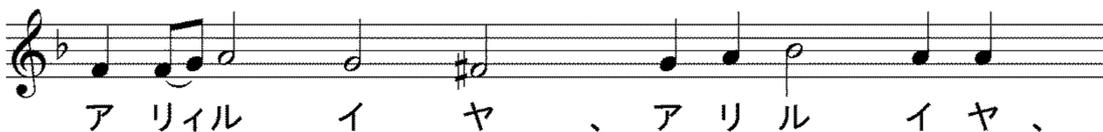
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた び かな} 至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌うは美なる哉、



誦經) ^{なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな} 爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たまい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

エヴァンゲリオン
【 福音經 ルカ福音書 53 端 10 章 25～37 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時一の律法師イイススに就きて、彼を試みて曰えり、師よ、我

何を爲して永遠の生命を嗣がんか。彼は之に謂えり、律法に何をか録せる、爾如何に読

むか。答えて曰えり、爾心を盡し、靈を盡し、力を盡し、意を盡して、主爾

の神を愛せよ、又爾の鄰を愛すること、己の如くせよ。イイスス之に謂えり、爾の

答えし所正し、之を爲せ、乃生きん。然れども彼は己を義とせんと欲して、イイス

スに謂えり、我が鄰とは誰ぞや。イイスス答えて曰えり、或人イエルサリムよりイェリホン

に下る時、盜賊に遇へり、彼等其衣を剥ぎ、彼に傷つけ、幾ど死するばかりにして、

彼を捨て去れり。適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同じくレ

ヴィトも彼処に至り、近づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟或サマリヤ人は行きて、此に至り、

彼を見て憫み、就きて、其傷に油と酒とを沃ぎて、之を裹み、彼を己の家畜に乗せ、

旅館に引き至りて、彼を看護せり。明日行かんとする時、銀二枚を出し、館主に與え

て、之に謂えり、此の人を看護せよ、費若し之より益さば、我返る時爾に償わん。此

の三人の中、爾孰を盜賊に遇いし者の鄰と意うか。彼曰えり、此の人に矜恤を

ほどこ もの かれ い ゆ なんぢ か ごと おこな
施しし者なり。イエス彼に謂えり、往きて、爾も是くの如く行え。

(比較用 口語訳) ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を歩いて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を歩いて行った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ